

汲古一心

『書の楽譜』

中村素堂

行の高低、字の切りどころは、そのまま音の高低であり、二、三字あるいは一字が離れて置かれているのは、そこを長くのばして唱うなどの覚えであったのではあるまいか。

つまり、短歌の写本であると同時に、楽譜のような性格を兼ねていた存在ではないかと想像してみると、散らし書きは、それこそ凍れる音楽であったのではなからうか。そう見てくると遠い古人の発想のおもしろさも偲ばれて、そこからこの「散らし書き史」の資料に注目し続けている。

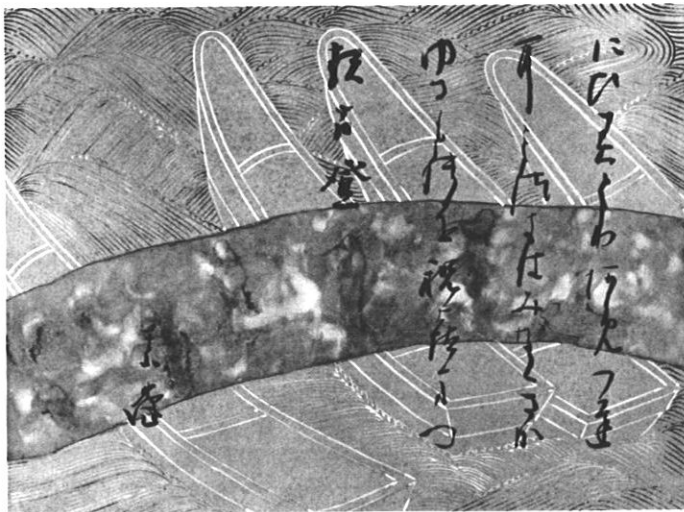
しかし、この散らし書きは、私の考えているような発想原点のものを維持してきたのではない。仮に眼で見える楽譜的なものというひとつの新しい手法が発見されたとしてもそれはみるみるうちに次から次へと発展を遂げて、原点ははるかに霞んでわからなくなるほど、大きくより美しく展開してきているのである。

そして、唱うことよりも空間処理の美、あるいは詩想の美表現などに重点が移ってきてきているのである。そして、これは俳句にもまた近代詩文などにもおのずから影響して、現代書芸術の進展に驚くべき寄与をしているのである。

初めは奈良の春日神社の社前にあった影向の松のところで、奈良の南にいた能楽の人々は、奉納の能を舞ったのだそうだが、この野外の舞は舞台を持つようになっても、背景に老木の松を描いた前で演じている。しかし、この能の系統から展開した歌舞伎や踊りの方でも、まだパネルは依然として老松のものもあり、また全く別個のものもあるが、唱う人と舞う人・囃子方の位置などに、松を背景においてのものが残っている。

春日神社の影向の松は、今なおいろいろな意味において生きているのである。それは芸のよりどころであったからであろうか。古筆・近代書芸の美しいものを前にして、実にこの単純に見える墨の芸術は、長い星霜の間にずいぶん多くの芸とか技術とかを綜合して、今日の成立をしているんだなとしみじみ感じ入るとき、かつて一葉の歌書きを披いて嫺々と唱っていたであろうむかしの人の姿が、眼に見えるようである。

今はその原初の人々の思いも及ばないほどの技術を積み重ねて、妍を競っている仮名書きの新鮮なる散らし方から、新たな作曲が生まれ始めるべきではないか。



【にひみとりあめつちにみつきはみな
くさかゆるものを祝きまつること】(ふぢばかま) 昭和56年

〔「書の手帖」
昭和四十六年一月〕